■特 集

難聴学級児童の言語力の経年的観察 (2)

——作文能力の経年的変化——

小林はるよ 田中美郷

要 約 : 15名の難聴学級児童に対し, 3年以上の期間にわたり(最終検査学年は, 小学5年以上), 1年に1回, 5枚のストーリーをもった絵についての話を書かせるという同一の課題で作文検査を実施, 作文能力の経年的変化を検討した。その結果,

1. 難聴児の作文能力には学年の上昇に伴う発達が見られるが, 健聴児と比較すると, 文法的側面できくに劣っている。
 2. 難聴児の, 同学年のあいだでの作文能力の順位は, 学年が上昇しても, あまり変動しない。
 3. 作文能力の経年的変化には, 読書力, 平均聴力レベルにより, 異なる特徴が見られる。
- ことを示し, 就学前期, 小学低学年までの言語獲得の重要性および言語力, 聴力を考慮した作文指導の必要を指摘した。

索引用語 : 難聴学級児童, 作文能力, 経年的変化, 早期教育

Progress in Linguistic Abilities in Hearing-impaired Children (2)

The Development of Writing Skills

Haruyo Kobayashi and Yoshisato Tanaka

Abstract : We studied the development of writing skills in 15 hearing-impaired children who were integrated in regular primary schools and received part-time therapy. Their achievements were compared with those of children with normal hearing.

The hearing level of the subjects was 89.9 dB on the average. They showed an average grade placement gap of almost a year in reading ability in the sixth grade.

The subjects were assessed for their writing skills once a year over a period of more than three years. The test required the subjects to write a composition about what they observed in a series of pictures. The results were as follows :

1. Writing skills improved as school grade and reading ability levels got higher, though difficulties varied according to the degree of hearing loss and reading ability.
2. The good writers in early grades were the good writers in higher grades and vice versa.

We concluded that, for good development of writing skills, language acquisition during early grades was very important, and to improve the writing skills of hearing-impaired children individual approaches were needed.

Key words : Hearing-impaired Children, Writing Skills, Linguistic Abilities in Hearing-impaired, Early Education

緒 言

難聴児の作文能力については、語い、文法などそのさまざまな側面で、同年齢の健聴児より劣っている、とされている¹⁻³⁾。わが国の研究にも、同一の課題で書いた作文を難聴児と健聴児の間で比較したもの^{4,5)}、特定の難聴児の作文能力の発達を検討したもの⁶⁾、文法の誤りについて分析したもの⁷⁾、訓練方法について検討したもの⁸⁾などがある。本報告では、同一の症例が、数年にわたって同一課題で書いた作文について、学童期の難聴児の作文能力の経年的変化の特徴、作文能力の伸びの比較、および、それらに關与する聴力、読書力、訓練開始時期などの要因について検討を試みた。

対 象

対象は堀内ら⁹⁾の扱ったものと同じで、東京都内難聴学級（小学校3学級）に在籍する難聴児である。ただし本論文で扱った難聴児は3年以上にわたって作文力検査を実施しえた、最終検査学年が小学校5年以上である15名である。対象群の聴力レベルの平均は89.9dB（S. D. 15.3dB）である。対照群として、都内の某区立小学校の2年、4年、6年の同一学級の生徒（男子）の名簿の前から順に、それぞれ10名、10名、9名に同じ検査を実施し、結果を比較検討した。

方 法

作文検査は、国立国語研究所が昭和34年に実施した検査¹⁰⁾と同じもので、図1のような5枚の絵を見せながら、作文を書かせた。指示を口頭で与えた後、絵の横に「絵を見て、楽しいお話をつくってください。」と書かれた文を読ませて理解させた。制限時間は設けなかった。この検査を年1回、難聴学級児童が来院して実施する定期検診のさいに行った。（本報告の(1)参照）

以上のようにして書かれた作文について、以下の3つの尺度によって評価した。第1は作文が単なる絵の説明から、書き手が想像を加えて構成する物語へと発展する内容的な側面を評価する尺度として、作文中に使用された文節数の総数である。第2に文法能力の側面を評価する尺度として表記の誤りを除く、語い、文法上の明白な誤りを含む文の、文総数にたいする割合をみた。第3に、認識的な側面を評価する尺度として、絵の説明に必要な要素が記述できている割合をみた。

絵の説明に必要な要素としては、以下の文の下線の部

分を、必要な要素とし、不正確でも、意味的に言及していると認められる表現があれば、記述されているものとみなした。

「うさぎが、シーソーに、のっていた。ねこがきて、シーソーの反対側にのると、シーソーが、つり合った（上下した）。犬がきて、ねこの後にのると、うさぎが

図1 作文検査に用いた絵

上がったしまった。ふたがきて、うさぎの後にのると、
¹⁰またつり合った(上下した)。¹¹ぞうがきて、¹²ぞうは1と
¹³うで、¹⁴他は4ひきでのと、¹⁵ぞうのほう下がってしま
¹⁶った。」¹⁷
¹⁸

この基準では必要な要素数は18となり、登場動物の名しか書けていない場合には、記述できた要素数は5となり、割合は5/18、28%となる。

つぎに、作文能力の伸びを比較するために、同学年の中で作文能力に段階をつけ、それが学年の上昇とともにどう変動するかをみた。上記の3つの尺度について成績がその学年の中央値以上である場合と中央値未満である場合とに分け、3つの尺度全部で成績が中央値以上である場合を段階A、2つの尺度で成績が中央値未満である場合をBとし、1つの尺度において成績が中央値以上で2つの尺度において中央値未満である場合をC、3つの尺度全部において成績が中央値未満である場合をDとし、検査学年ごとに作文能力をAからDのいずれかの段階に評価した。以下、本報告では、対象児が15名で、成績のばらつきが大きいので、代表値としては中央値を採用した。

結 果

はじめに作文能力の群全体としての経年変化を検討した。図2は、文節数の総数の推移を学年ごとの中央値で示したもので、実線は対象児群の、1点破線は対照群の成績を示している。縦の細い線は同学年の最小値から最大値までを示し、太い縦の線は中央値を中心として全体の50%の症例の成績の範囲を示している。文節数は学年の上昇とともに増加するが、最大値と最小値の差も増加する傾向が認められる。対照群と比較すると、対照群のほうが、どの学年においても、成績が良いが、50%の範

図2 文節数の推移

細い線は、最小値と最大値の範囲、太い線は50%の範囲、両群の間には、有意差がない。

図3 誤り文の割合の推移

細い線は、最小値と最大値の範囲、太い線は、50%の範囲、両群の間には、4年と6年で有意差がある。

図4 必要な要素の記述の割合の推移

細い線は最小値と最大値の範囲、太い線は50%の範囲、両群の間には、4年で有意差がある。

囲は重なっており、Uテスト検定をすれば、両群の間には、どの学年においても有意差がない。

図3は、誤り文の文節数に対する割合の推移を学年ごとの中央値で示している。学年の上昇に伴い、誤り文の割合は減少しているが、6年になっても中央値は59%である。対照群と比較すれば、2年では両群の間に有意差がないが、4年では $p < 0.001$ 、6年でも $p < 0.001$ で、いずれも有意差がある。

図4は必要な要素が記述されている割合の推移を学年ごとの中央値で示している。学年の上昇とともに群全体として成績が向上する傾向がみとめられる。しかし成績は対照群のほうが良く、4年では両群の間に $P < 0.01$ で有意差があり、6年では対照群に比べ最大値と最小値の差が大きい。

つぎに、図5に個々の症例について初回検査学年と最終検査学年の成績の段階がどう変動したかを示した。初回検査学年と最終検査学年での段階がA→Aのように同

じである場合が15名中7名、B→Cのように1段階変動した場合が7名、1名のみA→Dと下降した。全体として、同学年の中での相対的な評価には大きな変動がな

図5 相対的評価の変動

変動なし7名、1段階の変動7名、3段階の変動1名

く。低学年で成績が良いと高学年でも良く、逆に低学年で悪いと高学年でも悪い、という傾向がみとめられた。

図6には、最終検査学年の成績の段階ごとに対象児を4群に分け、個々の症例の経年的変化を示した。右下は段階Dの3名で、どの尺度においても成績はほとんど横ばいである。点線は、対象児群の中央値を示す。左下は段階Cの4名で、どの尺度においても経年的変化の幅が少なく、必要な要素の脱落が多い症例が目立つ。右上は段階Bの5名であるが、文節数の伸びが著しいが誤り文の克服が困難な傾向がみとめられる。また文節数が多いのに必要な要素の脱落が多い症例もある。左上は段階Aの3名で、誤り文が高学年で急激に減少しており、必要な要素の脱落は一貫して少ないが、文節数の伸びは段階Bほど著しくない。

図6 段階ごとの経年的変化

点線は、対象児群全体の中央値。段階Bは、文節数の伸びが著しい。段階Dは、成績の経年的変化が少ない。

考 察

はじめに本報告で採用した作文評価の3つの尺度について考察する。国立国語研究所の調査では、内容的な発展を示す指摘のなかに、会話が使用されているか否かと、情景描写—登場動物の「性別、名前、性格づけ、動作、表情などに着眼して表現しているか」が、あげられている¹⁰⁾。そこで文節数とこれらの指標との関連をみると、会話が表現されている作文のうち、もっとも文節数が少ない場合は48で、文節数が85以上の作文では10例全部に会話が表現されていた。情景描写については文節数が57からあり、文節数79以上の作文13には全例にみられる。すなわち文節数が多くなれば、物語としての内容をそなえてきて、書き手の想像によって書かれる部分が増す、といえる。

了解不能な意味不明文は1年では誤り文の割合83%中の40%であるが、6年では59%中の6%である。学年の上昇とともに意味不明文は、語い、文法などの部分的な誤りを含む文にかわり、誤りを含む文の割合は緩かに減少する。すなわち誤り文の割合の内容は、学年によって異なる。また、正しい文には簡単な文が多く、複雑な文には誤り文が多くなる⁹⁾という傾向もみられる。したがって誤りを含む文の割合という尺度は、文法能力の学年間の厳密な比較には適当でないが、少なくとも同学年の間では比較の尺度となろう。たとえば6年では誤りを含む文の割合が中央値の59%以上である6例全例に意味不明文があり、中央値未満である6例にはなく、誤りを含む文の割合が中央値未満から26%の間では2箇所以上の誤りを含む文があり、8%の1例では、1つの文の中に1箇所のみ誤り、という誤り文しかない。

つぎに必要な要素数の記述の割合が、群全体として増加する傾向がみられることは、内容や文法的な側面での改善が著しくない症例においても、必要な要素は学年の上昇とともに書き表されるようになることを意味する。「難聴児には、語りたい内容がたくさんあるのに、文法体系が十分身につけていないために(中略)文として整理しきれぬ」¹¹⁾という印象とも一致する傾向がみられるといえよう。

対象児群と対照群を比較すれば、物語を構成するという側面では、対象児群にも対照群に近い発達を遂げる症例が約半数いるが、その内容を脱落なく、正しく表現するという側面では対照群との差が大きく、3つの尺度全部で、対照群の成績の50%の範囲に入るのは、高学年15名中1～2名となる。

つぎに、作文能力の発達に影響する要因について考察する。最終検査学年における評価段階ごとに症例を比較

すると、訓練開始時期は段階Aが2歳0ヵ月～3歳0ヵ月、Bが1歳6ヵ月から5歳1ヵ月、Cが2歳0ヵ月～4歳0ヵ月、Dが2歳6ヵ月～4歳0ヵ月で、Dが全体として遅いが、明白な傾向は見出し難い。平均聴力レベルは段階Aが95～103dB、Bが73～95dB、Cが76～96dB、Dが71～135dBであり、Aがやや平均聴力レベルが重い。初回検査学年の読書力検査の偏差値は、段階Aが38～56、Bが39～59、Cが38～47、Dが31～49、最終検査学年では段階Aが39～56、Bが37～53、Cが42～45、Dが26～39で、A、Bには差がなく、Cには、偏差値が高い症例がなく、Dは低い。PIQには段階AからDまで高い症例が多く差がない。

読書力検査偏差値は段階A、Bに差がなく、C、Dが低く、作文能力評価との相関がみられるが、個々の症例をみれば偏差値が40前後でも相対的に高い評価を得る場合もあり、必ずしも一致しない。段階A、Bの間に読書力検査偏差値の差がなく、平均聴力レベルはAのほうが重いことを考えると、A、Bの作文能力には、差があるというよりも、傾向の違いがあるとみたほうが適当かもしれない。段階Bには、文節数の伸びが著しいのに、誤り文や必要な要素の脱落がみられ、Aには誤り文や必要な要素の脱落が少ないが、文節数の伸びは著しくない。したがってA、Bのいずれにも、豊富な内容を正しく記述するという課題が残されているといえよう。そして、A、Bの以上のような傾向の差には、平均聴力レベルの違いが反映されている可能性があり、指導の上からは、このような違いに応じた配慮が必要であろう。

堀内ら⁹⁾の報告では、低学年で読書力検査成績が良い症例は高学年でも良い場合が多く、成績に大きな変動がなかった。本報告における作文能力の評価でも同じ傾向があることを指摘したい。以上の結果は、文章力の調査で、低学年での個々の生徒の傾向が高学年にもちこされる¹²⁾とした、聾学校での結果とも一致している。早期教育、就学前期の言語獲得の重要性は、堀内ら⁹⁾および著者らの示した学童期の言語発達の1側面の分析からも確認されると考える。ただし、読書力検査成績においても、作文能力の評価においても、低学年で比較的高かったのに伸び悩んだきわめて高度な難聴を有する症例があること、平均聴力レベルの違いが作文の傾向に影響していると考えられることから、難聴学級児童の言語発達には、平均聴力レベルの影響も無視できない。

最後に、本報告と同じ課題を用いて聾学校在籍児の作文能力を分析した「作文にみる聴覚障害児の言語能力の発達」¹⁴⁾と、本報告の場合を比較すると、本報告では、一方的呼びかけではない会話が記述されている割合が、6年の12名中8名、67%で聾学校調査の37.5%を上回っ

ている。情景描写や、重さ比べをとりあげているなどの指標に関しては、差がない。会話の記述の多さに関しては、本報告の対象児が、難聴学級在籍児であることの影響が考えられよう。

ま と め

15名の難聴学級児童に対し、3年以上の期間にわたり(最終検査学年は小学5年以上)、1年に1回、5枚の、ストーリーをもった絵についての話を書かせるという同一の課題で作文検査を実施、作文能力の発達をみた。難聴児の作文能力は、学年の上昇とともに発達しているが、文法的側面では、中学年以上で、健聴児の成績とのあいだに差がみられた。また、小学校低学年で作文能力の成績の良い症例は高学年でも良く、順位の変動が少ない傾向があった。作文能力の経年的変化には、読書力、聴力との関係がみとめられた。以上の結果により、低学年までの言語獲得の重要性、作文能力の特徴を考慮した指導の必要を指摘した。

資料の収集、検査にご協力くださった帝京大学医学部耳鼻咽喉科小児難聴言語外来の、広田栄子さん、堀内美智子さんに深謝いたします。

文 献

- 1) Myklebust, H. R. : The Psychology of Deafness. Grune & Stratton, 1964.
- 2) Kretshmer and Kretshmer : The Perspective in Audiology Series, Language Development and Intervention with the Hearing Impaired. University Park Press.
- 3) Crandall, K. E. : Reading and Writing Instruction for Deaf Young Adults ; Deafness and Communication. Williams & Wilkins, 1982.
- 4) 今西伊都子 : 作文にみる聴覚障害児の言語能力の発達. ろう教育科学, 26(4) : 193-197, 1984.
- 5) 松本末男, 他 : 聴覚障害児の絵画題材への読み取り能力が作文へ及ぼす影響について. 聴覚障害, 10(367) : 4-13, 1981.
- 6) 川井 潤 : 聴覚障害児の書きことば(Ⅰ)—日記による縦断的研究(その1). ろう教育科学, 12(1) : 1-17, 1970.
- 7) 竹村 茂 : 聴覚障害児の日記指導—表現の誤りを中心に. 筑波大学附属聾学校紀要, 3 : 9-20, 1981.
- 8) 坂本多朗 : 文章表現の誤りをどう指導したか(Ⅲ). 聴覚障害, 35 : 10-18, 1980.
- 9) 堀内美智子 : 難聴学級児童の言語力の経年的観察—(Ⅰ)読書力の経年的変化. 音声言語医学, 27(3) : 223-228, 1986.
- 10) 国立国語研究所 : 小学生の言語能力の発達. 明治図書, 1965.
- 11) 伊藤恵美 : 作文能力の発達の一側面(その3). 聴覚障害, 5(350) : 31-38, 1980.
- 12) 山本隆三 : 聴覚障害児の文章表現について—一文章完成法テストの結果を中心として—. 筑波大学教育学部附属聾学校紀要, 1(1) : 71-84, 1979.

別刷請求先 : 〒173 東京都板橋区加賀2-11-1

帝京大学医学部耳鼻咽喉科学教室

小林はるよ